柳のおりうに就て

泉鏡花作

全一章

先頃園部君が見えての話に、今度新富座で九女八が柳のおりうを演ずるに就き、同優が種々苦心して、初手の別は工夫が着いたが、二度目の出と引込とが、一體脚色は幽靈で無いのだから、今までのやうにすつぽんと消えたり、宙釣に成つたり、燒酎火を燃したりしたくない、外に考案は有るまいかとの事。

其に就き、私は所好な役者の爲る狂言を選つて見るばかりで、芝居の事に暗いから、唯參考までゝすが、元來凄味と云ふものは、餘程氣を着けぬと、惡くすると滑稽に成る。あの古御所の化物だつて、出方が良くないと、大宅太郎に一睨みに為れて幅が利かぬやうな次第で、恁うやつて坐つて居る處でも疊の合せ目から、切禿の顔を出して笑つたり、天井から血塗れの足をぶら下げたり爲たのでは、却つて道

化に成つて怖いよりは馬鹿々々しい。第一化物の威厳を損じて、もし之に扮する人があるとすれば、其の人の藝の品格に拘ります。

ですから矢張幽靈に限らず、何でも出入は當り前に人の爲るやうでなくつてはいけません。然し習慣になつて居るから、ヒユウドロ／＼／＼は幽靈、バタ／＼で申上げ升が出ると、見物の方で承知して済むものゝ、おりうは如何にも木精なのですから、燒酎火で出沒するのは可笑なものです。

私の考へには、又もや殘る執着にと云ふ出の先へ、もし芝居で出來るものなら、颯と一時風の音を聞かせて、知らぬ顏をして、それで見物の氣を奪つて置いて、やがて自然に障子をすらりと開ける、其中からお柳が、少し奥深く姿を見せて、悠々と澄して出たら可いでせう。

また風の音だけで風情が足りなかつたら、二ツ三ツ蛍火を寂しく飛ばせる事に爲たらと思ひます。（眼七が通力高田の馬場に螢を飛ばすか、などゝ言ひツこなしですよ。）

それから引込、これは母様いなうと追掛けるのを避けながら、二重なり平舞臺なり、勝手の良い處へ行つた時、空から柳の葉が繁つたのを一枝、仕掛で颯と下すのです。今度は以前見物の目を奪つたと反對に、シテのお柳が、登場して居る他の役者の目を奪ふので、平太郎始め、其の柳の枝をお柳の姿だと思ふ誂へ、緑丸も取縋るのを機會に、身を躱して其儘すら／＼と花道へ出て、澄して通つて、揚幕の處で後向のまゝ一一寸留る。

途端に心着いて、あれ、彼處にと言ふ思入で、舞臺の三人が形好く振返ると、お柳も振向く、此處で九女八が柳の精神で熟と見合つて、其なり直に揚幕を揚げさせて入るやうに為たら如何でせう。

舞臺と揚幕の際とでは、ちよつと距離が有り過ぎるやうだけれど、他の役々／＼が居る處と、木精が消える處とは離れた方が、伐木丁々／＼と照應して、餘韻があつて好からうと思ふのです。而して舞臺から花道へ掛る工合は、能の後シテが、橋掛へ引込む意氣込、川柳に悪口が言つて有る、消えにけり幽霊未だ橋掛、

でも構はず、大膽に行つたら可いではありませんか、見得だとか、氣合だとか、其は專門の役者に一任するとしてと、折角ですから恁う申しました。

（談話。　ー　此のほか談話のみだしは、すべて、其の時々の記者諸氏の題するところ、いま敢て改めず。）

【完】